

<論文>

談話における照応と階層構造

時 崎 久 夫

0. はじめに

本稿は談話 (discourse) のレベルにおける定名詞句 (definite NP) の照応関係を、談話内に階層構造を仮定することで説明しようとするものである。理論的な枠組みとしては、基本的に生成文法の統語論を用いる。まず第1節で、これまでのこのテーマに関する研究を概観し、その問題点を検討する。第2節では、談話内にも線的順序に基づく階層構造を仮定できることを論じる。第3節では、この構造を基に、文内の照応と共通の一般的な制約によって談話内の照応を扱うことができることを述べる。そして第4節では、この統語的制約を支えている語用論的な原理について考察する。*

1. これまでの研究

談話の構造と照応の関係を扱った研究としては、Hinds(1977), Fox(1987), van Hoek(1992) などがあるが、ここでは Hinds (1977) と Fox (1987) の研究を代表として概観し、問題点を指摘する。

1.1 Hinds (1977)

Hinds (1977: 83 f.) は次の (1) のような談話を例としてあげ、その構造について論じている。

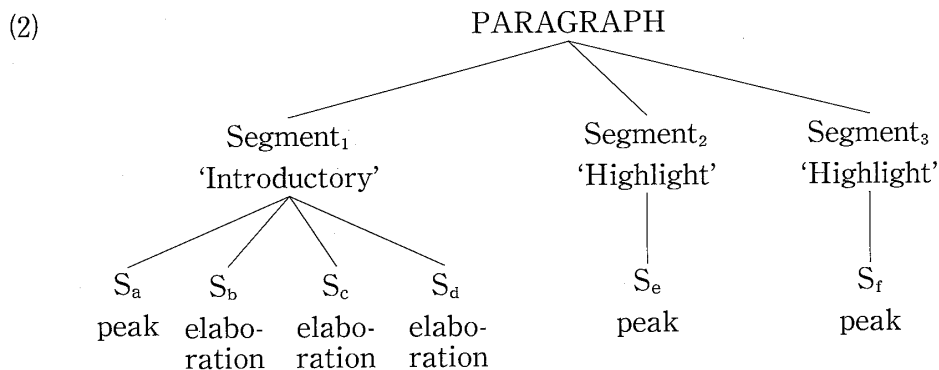
(1) FAMOUS ARTIST IWATA DIES AT 73 (*Japan Times*: 2/9/74)

- a. Sentaro Iwata, a celebrated artist and 1961 winner of the Medal of Honor with Purple Ribbon known for the sensuous illustrations of slim, kimono-clad women he did for periodicals, died of cerebral hemorrhage in Tokyo

Tuesday.

- b. He was 73.
- c. He complained of a severe headache and nausea at about 8 p.m. Monday while working on magazine illustrations at his house in Shibuya Ward, Tokyo, and soon fell unconscious.
- d. He was taken to the Keio University Hospital in Shinano-Machi, Tokyo, where he died at 10:35 a.m. Tuesday.
- e. Born as the son of a printer in Asakusa, Tokyo, in 1901, Iwata became one of Japan's most popular illustrators when, at 25, he worked for the famous novel 'Ako Roshi' (The Tale of 47 Ronin) written by the late Jiro Osaragi.
- f. In 1955, Iwata won the Kan Kikuchi Prize, an award for those having done outstanding work in art and journalism.

(1) は画家岩田専太郎の死を報じた新聞記事であるが、Hinds は (1a) から (1f) までの5つの文が順に並んでいるだけでなく、いくつかでまとまって Segment (連鎖) という構成素を形成し、さらにこの segment が集まって paragraph (段落) を構成していると考えている。¹



ここで文 S_a , S_e , S_f はいずれもそれぞれの segment のうちで意味的な中心を成すものと考えられ, peak (頂点) と名付けられている。 S_b , S_c , S_d は S_a の内容を敷衍したものであり, elaboration (詳述) と呼んでいる。すなわち 1 つの segment は 1 つの peak といくつかの elaboration から成るということである。そして full NP は peak の文に現れ, 代名詞は elaboration の文に現れると Hinds (1977 : 82) は述べている。²

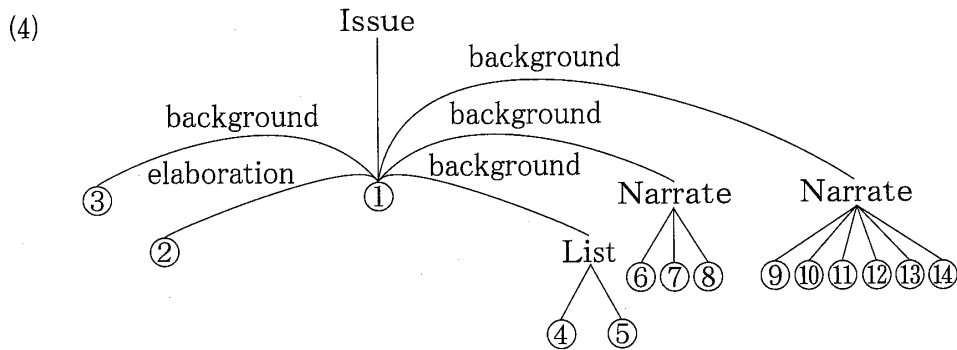
1.2 Fox (1987)

同様の観察は Fox (1987 : 111 f.) にも見られる。Fox のあげる談話の例は次である。

- (3) ① James S. Albertson has been appointed acting academic vice president by the Regents following President Saxon's recommendation.
- ② The appointment is effective from March 1 until a permanent academic vice president is named.
- ③ Academic Vice President Donald C. Swain earlier was named president of the University of Louisville.
- ④ *Albertson* will be responsible for academic planning and program review, student affairs, financial aid, admissions, student loan collection, student affirmative action, basic skills, the Education Abroad Program, library plans and policies and UC Press.
- ⑤ *He* also is responsible for UC Extension, summer sessions, instructional media, Continuing Education of the Bar, and liaison with the Academic Senate the Student Body President's Council and the California Post-secondary Education Commission.
- ⑥ *Albertson* has been special assistant to Swain since 1978.
- ⑦ For four years prior to that *he* was assistant academic vice president.
- ⑧ *He* joined UC in 1973 as director of analytical studies.
- ⑨ *Albertson* is a graduate in classics at St. Louis University.
- ⑩ *He* earned his M.A. in philosophy there in 1953
- ⑪ and received the Ph.D. in physics in 1958 at Harvard.
- ⑫ *He* joined the faculty at Loyola University of Los Angeles in 1962
- ⑬ and became chairman of the department before *he* left in 1968 to join the faculty of the University of Santa Clara as professor of physics.
- ⑭ *He* was also academic vice president as Santa Clara.

(*University Bulletin*, March 23, 1981)

Fox はこの談話に対して次の構造を提案している。



Fox は、full NP は新しい rhetorical unit の最初に使われ、それ以外は代名詞が使われると述べている。実際に(3)の談話では、④、⑥、⑨ の文がそれぞれの unit の最初に当たり、Albertson という形が使われている。そしてそれ以外の ⑤、⑦、⑧、⑩、⑫、⑬、⑭ では he が使われている。

1.3 これまでの研究の問題点

これまで見た Hinds と Fox の研究はどちらも、談話の構成素の中で最初は full NP が使われ、その構成素内ではそれ以降は代名詞が使われるという一般化であった。

しかしこの説明には2つの問題があると思われる。まず1つは、なぜ新しい談話の構成素が始まると再び full NP が使われるのかということである。確かに上で見た (2) の構造では Segment₁ の最初の文だけでなく Segment₂, Segment₃ においても full NP が使われている。また (4) の構造では List の最初の文 ④ に加えて2つの Narrate の最初の文 ⑥、⑨ でも full NP が使われている。よって「新しい談話の構成素においては再び full NP が使われる」というのは正しい記述的な一般化であるが、それはなぜなのかという理由を原理的に説明する必要がある。

この問題に関連する2つめの問題は、(2) や (4) のような構造を仮定すると、1文内の照応に対する制約との共通性をとらえられないということである。Reinhart (1976, 1983) の研究でよく知られているように1文内の照応には次のような制約がある。

- (5) A given NP must be interpreted as non-coreferential with any distinct non-pronoun in its c-command domain. (Reinhart 1983: 43)

この制約によって、次のような例で同一指示解釈ができないことが説明できる。(下付きの *i* は同一指示を表す。)

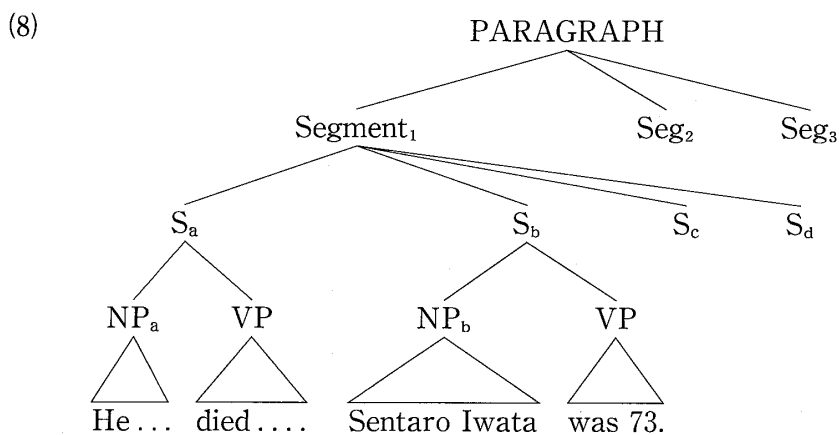
(6) *He_i gave a party at Ken_i's house yesterday.

(6) では he が Ken を c-command しているため, Ken は he の c-command 領域内にあり, 従って he は非代名詞である Ken と非同一指示と解釈されなければならない。

しかし, この制約は Reinhart 自身が述べているように, 文を越えた談話のレベルにおける照応関係を説明するものではない。例として (1) の談話で代名詞と先行詞を入れ換えた場合を考えてみよう。

- (7) a. He, a celebrated artist and 1961 winner of the Medal of Honor with Purple Ribbon known for the sensuous illustrations of slim, kimono-clad women he did for periodicals, died of cerebral hemorrhage in Tokyo Tuesday.
 b. Sentaro Iwata was 73.

この談話は he と Sentaro Iwata が同一指示とするなら非常に不自然である。しかし, 仮に Hinds (1977) が示している (2) の構造が正しいとして, (7) の構造を詳しく見てみるならば次のようになるだろう。



この図で NP_a は NP_b を c-command しないので (5) の制約では (7) が不自然であることを説明できない。³

よって上で見たように, 「談話の構成素の中で最初は full NP が使われ, その構成素内ではそれ以降は代名詞が使われる」というような一般化を (5) の制約とは別に述べ, (7) がその一般化に反していると説明する必要がある。

しかし, この説明は理論の簡潔性という点で問題がある。もし 1 文内の照応と 1 文を越えた談話の照応が同じ原理に基づくものだとすれば, それぞれに対して, 構造に基づく制約 (5) と, 要素の線的順序に基づく一般化という種類の異なる制約を 2 つ立てることは簡

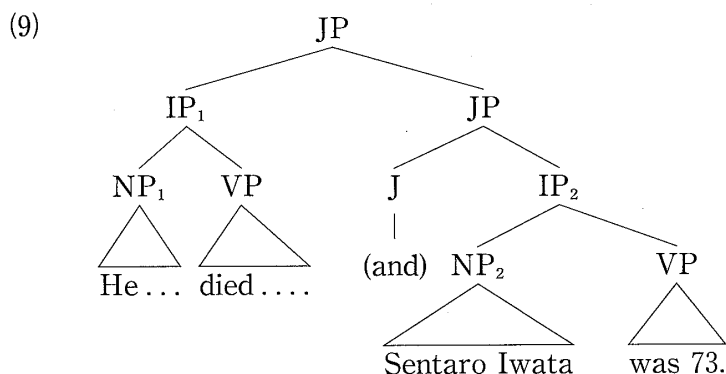
潔ではなく、また真の一般化にもならない。

以上この節では Hinds (1977) や Fox (1987) の分析について、「新しい談話の構成素においては再び full NP が使われる」という一般化に対する原理的な説明がないこと、そしてこの一般化は 1 文内の照応に対する制約とは別に述べなければならず、理論全体として簡潔性を欠くという 2 つの問題点を指摘した。次の節で、文内の照応と談話の照応は同じ原理に基づくものと考え、照応現象を統一して説明する方法を論じる。

2. 談話における階層構造

2.1 2 つの文から成る談話

この節では新しい句構造理論をもとに談話の構造を再考する。まず、2 つの文から成る談話について見ることにしよう。筆者は時崎(1995)で 2 つの文から成る談話の構造と照応に対する制約について考察した。そこでは、基本的に Larson(1990)に従い、無標の場合、2 文から成る談話は等位構造の延長であり、音形を持たない等位接続詞を主要部とする投射と考えた。この考え方によれば、(7) の構造は次のようになる。



この図では NP₁ は NP₂ を c-command しないため、上で見た Reinhart の (5) の制約ではこの談話の不自然さを説明できない。しかし、時崎 (1995: 12) では 1 文内と談話に共通に働く制約として、次の制約を提案した。

- (10) (An XP containing) an R-expression cannot be c-commanded by (an XP containing) a coreferential phrase.

この制約は、R 表現 (を含む XP) が同一指示句 (を含む XP) より階層的に上位になくはならないということを述べたものであるが、この制約によって (7) の談話の不自然さを説明することができる。(7) の構造を示している (9) では、R 表現の Sentaro Iwata を含む

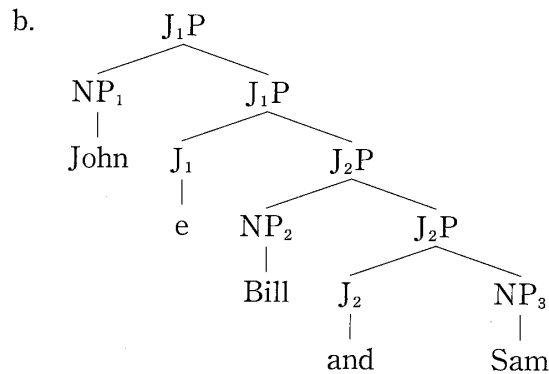
XP である IP_2 が、同一指示句 he を含む IP_1 によって c-command されているため、(10) の違反となるからである。またもとの談話 (1) の a, b では (9) の he と Sentaro Iwata が入れ替わるのだから、Sentaro Iwata を含むのは (9) の IP_1 であり、これは he を含む IP_2 によって c-command されず、適格であると正しく予測される。

このように文と文が階層的な違いを持って結びついていると考え、2つの文から成る談話の照応について、一般的な制約 (10) によって自然な説明ができる。

2.2 3つ以上の文から成る談話

では3つ以上の文から成る談話の構造はどうであろうか。これを考えるために、Kayne (1994: 57) の等位構造についての議論を見てみることにする。Kayne は3つの NP からなる等位構造に対して、接続詞の主要部 (head) を2つ考えている。

(11) a. I saw John, Bill and Sam.



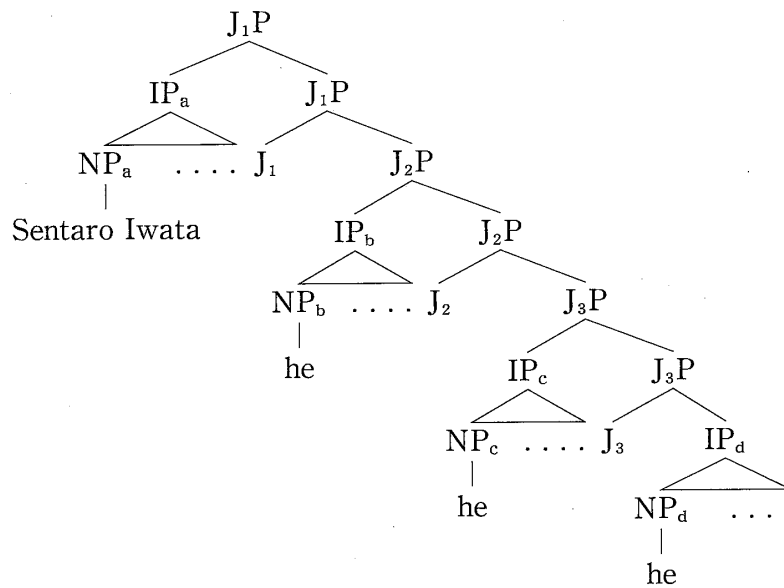
(11 b) では音声的に空の接続詞 J_1 が、指定部として NP_1 を、補部として等位構造の J_2P をとっている。Kayne は4つの NP からなる等位構造について述べていないが、これに対しては次に示すように、もう一つ空の接続詞を仮定することになる。

(12) [John J_1 [Bill J_2 [Sam [and Dick]]]]

また、Kayne は NP 以外の等位構造について述べていないが、ここでは IP も含めて他の XP の等位構造も同様であると考えことにしよう。

すると例えば (1) の a, b, c, d の文は次のような構造を成していると言える。

(13)



ここでは NP_a が NP_b , NP_c , NP_d を c-command しており, (10) の制約から, NP_b , NP_c , NP_d には NP_a と同一指示的な R 表現は現れることができないことになる。適格な(1)の談話では, 上の(13)に示したように, NP_a に R 表現が現れ, NP_b , NP_c , NP_d にはそれと同一指示的な代名詞が用いられているので問題がない。これに対し, 2.1 でも見たとおり, 不自然な(7)の談話では NP_a が代名詞で, NP_b の R 表現を c-command するために(10)の制約に違反する。このように考えると, 談話において最初に R 表現が現れ, 次からはそれを代名詞で受けるという流れは, (13)に示したような談話の階層構造を反映したものであると言えよう。

3. 談話の構成素

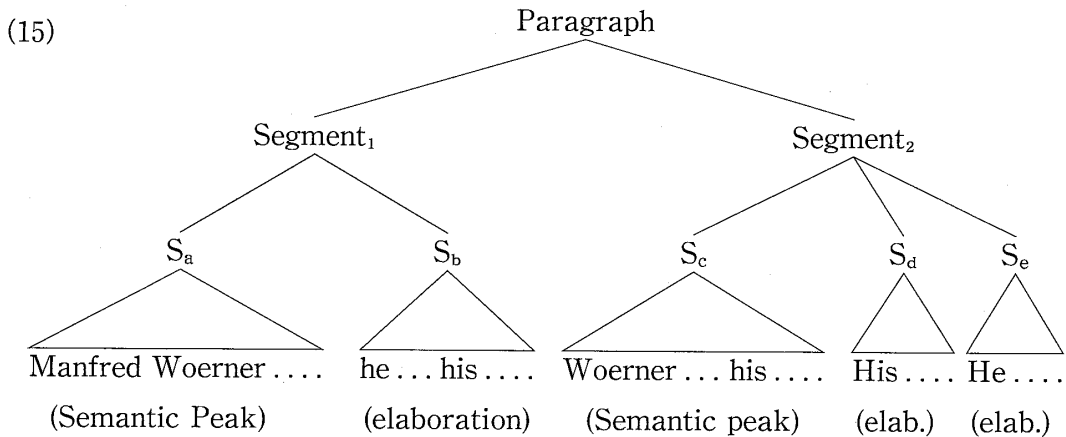
さてここで, すべての文がこのような形で階層的に結びついているのかという疑問が起る。もしそうだとするならば, すべての談話は右下がりの構造を持っており, 左にある名詞句が常に右にある名詞句を c-command することになる。よって 2 番目にでてくる名詞句以降はすべて代名詞のみしか許されないということになってしまう。しかし, これは上で見た(1)および(3)の談話を考えればわかるように正しくない。(1)では e, f の文で Iwata, (3)では④, ⑥, ⑨に Albertson という R 表現がそれぞれ再度使われているからである。

そうすると, やはり Hinds (1977) や Fox (1987) の考えに従って, 談話内に文以上の構成素を考えることがこの問題の解決につながると思われる。ここでは次の談話を例とし

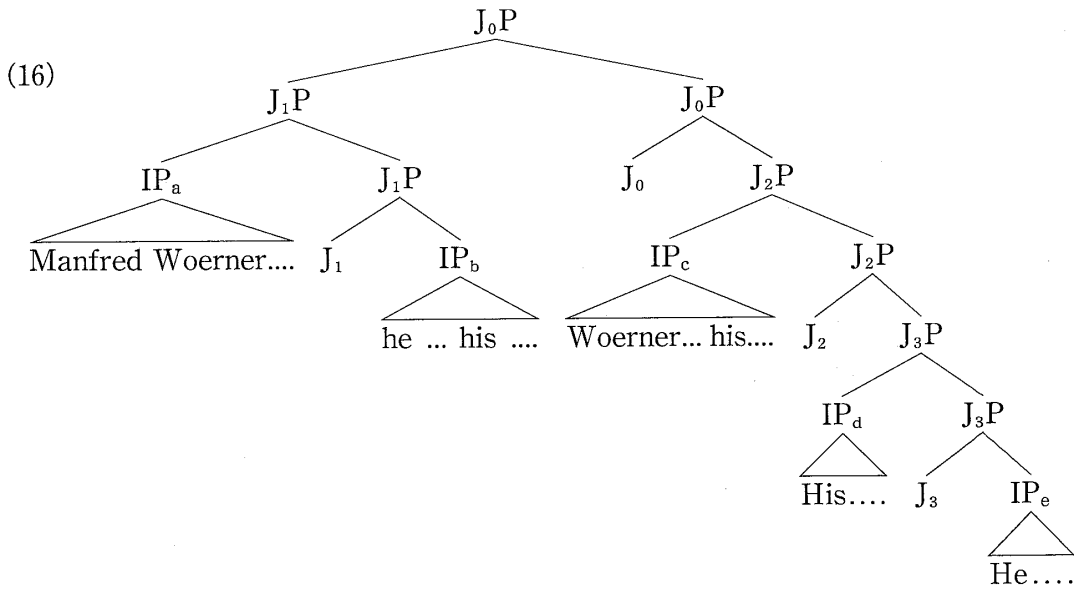
て考えていくことにしよう。

- (14) a. DIED: NATO secretary-general Manfred Woerner_i, 59; of colon cancer, in Brussels, Aug. 13.
- b. Recuperating from a recent cancer operation, he_i had planned to return to his post in September.
- c. Trained as a lawyer, Woerner_i served as German defense minister (1982-88) before assuming his_i NATO post in 1988.
- d. His_i tenure witnessed the signing of the Conventional Armed Forces (CFE) agreement in 1990, the fall of communism in Eastern Europe and the disintegration of the Warsaw Pact.
- e. He_i was widely credited with adapting the military alliance to a post-cold-war world and for forging diplomatic and military ties with NATO's former Soviet bloc enemies. (*Newsweek*, August 22, 1994: 47)

(14)は(1)と同じく死亡記事であるが、話題の人物はaでfull nameで談話に導入されたあと、bでは代名詞となり、cでまたfamily name、そしてそれ以降は代名詞で指示されている。この談話の構造はHinds流に表せば次のようになるだろう。



しかし、前節で述べたようにこの構造を仮定した場合は問題が生じる。そこで文と同様に、(15)におけるsegmentに当たる2つの構成素も音韻的に空の等位接続詞で接続されていると考えてみよう。すると(14)の談話の構造は次のようなものになる。



ここでは J_1P , J_2P がそれぞれ(15)の Segment₁, Segment₂ に相当し, 接続詞 J_0 の指定辞と補部になっている。これは等位構造を接続詞の投射とする Larson (1990) の考えを談話の構成素にも拡張したものである。

さてここで(16)の構造と制約(10)の関係を見てみよう。(10)を参照のためにここに再び示す。

- (10) (An XP containing) an R-expression cannot be c-commanded by (an XP containing) a coreferential phrase.

(16)において, IP_c 内にある R 表現 Woerner と同一指示句である IP_a 内の Manfred Woerner および IP_b 内の he と his が問題となる。Manfred Woerner を含む IP_a および he と his を含む IP_b はどちらも Woerner を含む IP_c を c-command しないため, (10)で XP を IP とする場合は同一指示が可能と正しい予測ができる。

しかし Woerner を含む J_2P は Manfred Woerner と he 及び his を含む J_1P に c-command される。よって(10)で XP を JP とすると, この制約によって(16)の同一指示は不可という予測になってしまう。そこで強力すぎる(10)の制約を弱める必要がある。一つの方法としては, 次の(17)に示すように, (10)の制約に $X \neq J$ という条件を付けることが考えられる。

- (17) (An XP containing) an R-expression cannot be c-commanded by (an XP containing) a coreferential phrase. ($X \neq J$)

こうすれば Woerner を含む J₂P が同一指示句の Manfred Woerner と he と his を含む J₁P に c-command されてもこの制約の違反とはならず、同一指示が可能という正しい予測になる。この X ≠ J という条件は制約の適用範囲を J₁P, J₂P のような 1 つの談話の構成素内に限る働きをしている。⁴

4. 照応と会話の原理

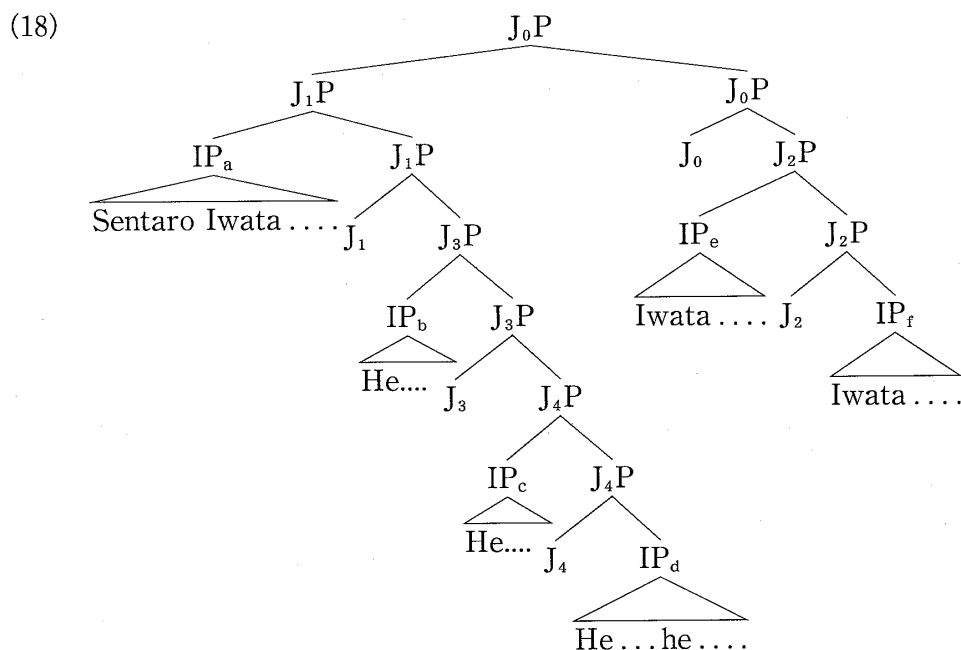
ここで上に述べた制約(17)の意味について考えてみよう。時崎 (1991) でも述べたように、代名詞の使用というのは、必要のない限り労力を小さくしようとする言語の経済性に基づくものであると言える。(17)の制約は、経済的でない R 表現という形を避けなければならないということを述べている。しかし言語は単に経済的であれば良いわけではない。言語の目的である伝達ということを考えると、曖昧さをなくし明確に表現するという必要性がでてくる。このことを協調の原則 (cooperative principle) として述べたのが Grice (1975) であったが、明確に表現するということは代名詞を使うかどうかということに関係してくる。

このことを具体的に見るために Hinds (1977) の (1) の例についてもう一度考えてみよう。参照のために (1) をもう一度ここに示す。

- (1) FAMOUS ARTIST IWATA DIES AT 73 (*Japan Times*: 2/9/74)
- a. Sentaro Iwata, a celebrated artist and 1961 winner of the Medal of Honor with Purple Ribbon known for the sensuous illustrations of slim, kimono-clad women he did for periodicals, died of cerebral hemorrhage in Tokyo Tuesday.
 - b. He was 73.
 - c. He complained of a severe headache and nausea at about 8 p.m. Monday while working on magazine illustrations at his house in Shibuya Ward, Tokyo, and soon fell unconscious.
 - d. He was taken to the Keio University Hospital in Shinano-Machi, Tokyo, where he died at 10:35 a.m. Tuesday.
 - e. Born as the son of a printer in Asakusa, Tokyo, in 1901, Iwata became one of Japan's most popular illustrators when, at 25, he worked for the famous novel 'Ako Roshi' (The Tale of 47 Ronin) written by the late Jiro Osaragi.

- f. In 1955, Iwata won the Kan Kikuchi Prize, an award for those having done outstanding work in art and journalism.

すでに (2) で見たように Hinds は, e, f の文で Iwata という名詞句が使われているため, この 2 つの文それぞれが独立に 1 つの segment を成すとしている。しかしこの談話を意味の点から見てみると, a, b, c, d が岩田専太郎の死という 1 つの新しい出来事を伝える部分であり, e, f はその経歴を説明している部分である。すると (1) が Hinds が言うように 3 つの segment でできていて, e, f がそれぞれ 1 つの segment だとするのは無理があろう。(1) の構造は次のように J_1P , J_2P の 2 つの segment からなるものと考えられる。



ここでまた問題が起こる。(18)で IP_e は IP_f を c-command しているので IP_f 内の R 表現 Iwata は (17) の制約に違反している。ではなぜ IP_f で経済的でない R 表現が使われているのだろうか。おそらくその理由は, IP_e の終わりの部分に Jiro Osaragi という別の男性が登場していることであろう。経済性の点から言えば, IP_f で代名詞を使う方がよい。しかし he をここで使うとその指示対象が Iwata なのか Jiro Osaragi なのか曖昧になってしまう。そこで IP_f では経済性を犠牲にして Iwata という R 表現を使って明確に指示を表していると考えられる。そして経済性を犠牲にするということは (17) の制約に違反することである。とすれば (17) は絶対的なものではなく, 他の条件が優先される場合には満たされなくてもよい弱い制約であると言える。

5. まとめ

以上、談話における照応について、談話を階層構造と考えることにより文内と共通の制約 (17) によって説明することを試みた。談話に段落などの構成素を認めること自体は新しいことではないが、この構成素間に c-command で表されるような上下関係があるという点がこの考察の重要な主張である。制約 (17) は、できるだけ、より小さな名詞形を使うという言語の経済性に基づくものであり、制約としては弱く、他の条件による必要があれば違反を許すものであることを述べた。

この考察は談話の構造一般に当てはまるものと考えているが、ここでとりあげた談話の例はごくわずかなものであり、より多くの種類の例に当たって検討していく必要がある。また制約 (17) と他の条件との関係についてもさらに考える必要があると思われる。

注

* 本稿は日本英文学会北海道支部第 39 回大会 (1994 年 10 月 2 日北海道大学) シンポジウム「英語の照応現象」における口頭発表の一部に基づいており、時崎 (1995, 1996) の統編を成すものである。貴重なご意見を下さった方々に感謝を申し述べたい。なお本研究は平成 7 年度札幌大学研究助成(共同研究)による成果の一部である。

- 1 Hinds (1977) の用語に対する訳語は神崎 (1994) によっている。Hinds (1977) のより詳しい紹介についても神崎 (1994: 195-197) を参照。
- 2 意味的な頂点の部分に full NP が現れ、従属的な部分に代名詞が現れるという一般化は 1 文内の照応についても当てはまる。McCray (1980), 神崎 (1994), 時崎 (1996) を参照。
- 3 Reinhart は統語構造を 1 文内にしか考えず、統語的な (5) の制約は文を越えては適用しないとしている。そして談話のレベルでは別に語用論的な制約が働いていると述べている。しかし、時崎 (1995) でも述べたように、これは 2 種類の制約を照応という 1 つの現象に課するもので、十分な根拠がなければ理論の簡潔さという点から望ましくない。
- 4 もう一つの方法として、「(10)の制約は、R表現を含む XP がより大きい構成素になっていくに従って弱くなる」と述べることもできよう。これは制約の作用に段階性を認める考え方であり、こちらのほうがより柔軟で、広い事実や細かい容認性の差を説明することができるかもしれない。例えば、より大きな談話の構成素としては段落 (paragraph) や章 (chapter) という単位が考えられるが、前の段落や章で代名詞で出ていたものに対して、次の段落や章でもう一度 R 表現を使うことはきわめて普通に起こることである。しかし、ここではこれ以上深入りせず、(17) のように制約の適用範囲を制限する方法を採っておく。

参考文献

- Fox, Barbara. 1987. *Discourse Structure and Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and conversation," in P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics vol.3: Speech Acts*, New York: Academic Press, 41-58.
- Hinds, J. 1977. "Paragraph structure and pronominalization," *Papers in Linguistics* 10, 77-99.
- van Hoek, Karen Ann. 1992. *Paths Through Conceptual Structure: Constraints on Pronominal Anaphora*. Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- 神崎高明. 1994. 『日英語代名詞の研究』 研究社.
- Kayne, Richard S. 1994. *The Antisymmetry of Syntax*, Cambridge, Mass.: MIT press.
- Larson, R. K. 1990. "Double objects revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 21, 589-632.
- McCray, Alexa T. 1980. "The Semantics of Backward Anaphora," *NELS X*, 329-343.
- Reinhart, Tanya. 1976. *The Syntactic Domain of Anaphora*. Doctoral dissertation, MIT.
- Reinhart, Tanya. 1983. *Anaphora and Semantic Interpretation*. London: Croom Helm.
- 時崎久夫. 1991. 「同一指示解釈の語用論的原理」『北海道大学文学部紀要』第 39 卷第 3 号, 73-90.
- 時崎久夫. 1995. 「定名詞句照応と線的順序」『文化と言語』(札幌大学外国語学部紀要) 第 28 卷第 2 号, 1-21.
- 時崎久夫. 1996. 「逆行照応の句構造」『北海道英語英文学』第 41 号, 81-90.